

平成21年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	看護師育成教育に必須の自己発見力・現場適応力育成教材の開発		
法人名	学校法人穴吹学園		
学校名	専門学校穴吹医療カレッジ		
代表者	理事長 穴吹 キヌエ	担当者 連絡先	伊藤 慎二郎 087-823-5700
1. 事業の概要			
<p>本事業は、看護師を目指す学生のため、以下の教育プログラム開発をし、基礎力の向上を目指した。</p> <p>開発した教育プログラムは以下のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> ①自己発見ツール ②看護師コミュニケーション育成テキスト ③看護師コミュニケーション育成教員向け指導書 ④CD-ROM（実習用にフォーマットをまとめたもの） <p>開発した教材をもとに本学園の学生を対象に研修を行い、看護の臨地実習前と後のコミュニケーションスキルを測定し変化を検証した。</p> <p>本事業を進めるにあたり、専門学校3校、病院、企業、医療系大学、業界団体3団体の代表者9名で実施委員会を組織し、開発方針の策定、説明会・実証授業の企画、予算・進捗の管理を行った。</p>			
2. 事業の実施に関する項目			
①開発したプログラム・教材・教育手法等の概要			
<p>■自己発見ツールの開発</p> <p>学生が看護職を目指そうと思ったきっかけについて、過去、現在、未来をあらためて見つめ直すことで自己理解・自己発見するための教材を開発した。</p> <p>■看護師コミュニケーション育成テキストの開発</p> <p>知識・技術とは別に、新人看護師に求められるコミュニケーションスキルを学習するための、医療現場でのコミュニケーションを想定したロールプレイ／ケーススタディ教材を開発した。</p> <p>■看護師コミュニケーション育成教員向け指導書の開発</p> <p>教材を授業で効果的に活用するための考え方、ねらいやヒント、工夫すべき点を解説した教員向け指導書を開発した。</p>			

■CD-ROM

授業での活用を促進するため、協力専門学校教員の意見により、自己発見ツールの実習用フォーマットのデジタルデータを収録した CD-ROM を作成した。

②ニーズ調査等（手法・期間・効果）

■看護師育成に関するアンケート調査

目的：医療現場における看護師育成、看護師養成機関に期待する教育 について現場からの意見を集約する。また、看護師の早期離職に関する医療現場の取り組みと専門学校が取り組むべき教育を明らかにする。

対象：全国の医療機関 977件 回答 222件 (22.7%)

実施時期：平成 21 年 11 月～12 月

学生に不足している能力としてコミュニケーション能力 (20.6%) の指摘が最も多く、本事業の取り組みの方向性と一致していることが確認できた。

●学生に特に不足していると思われる能力

A. 包容力	14	1.6%
B. 言葉づかい	92	10.8%
C. マナー	89	10.5%
D. 理解力	43	5.1%
E. コミュニケーション能力	175	20.6%
F. 発想力	57	6.7%
G. 倫理観	48	5.6%
H. 生物学	8	0.9%
I. 解剖学	37	4.3%
J. 病理学	12	1.4%
K. 薬理学	12	1.4%
L. 分子生物学	3	0.4%
M. 統計学	3	0.4%
N. EBN	31	3.6%
O. 判断力	69	8.1%
P. 分析力	52	6.1%
Q. 対応力	88	10.3%
R. その他	18	2.1%
	851	

●新人看護師の主な退職理由

A. 人間関係	170	32.1%
B. 待遇	22	4.2%
C. 将来性	9	1.7%
D. 教育システム	22	4.2%
E. 充実感	47	8.9%
F. 健康面	70	13.2%
G. 知識不足	79	14.9%
H. 技術不足	86	16.2%
I. その他	25	4.7%
合計	530	

●管理者として新人看護師に期待する能力

A. 新人サポート体制の強化	185	31.4%
B. 技術習得段階に応じたきめ細かな教育研修	151	25.6%
C. 新人の業務量（夜勤回数、超過勤務時間等）の改善	119	20.2%
D. 医療安全対策の充実	89	15.1%
E. 特になし	1	0.2%
F. その他	45	7.6%
合計	590	

早期離職する看護師には共通した傾向があるかとの質問に73.9%があると回答した。主な特徴として、職業観が希薄、精神的に弱い、適応能力不足、コミュニケーションが苦手などが上げられている。

■看護師養成機関ヒアリング調査

目的：看護師などの医療系人材を育成している教育機関に学生の臨地実習の際にモチベーションを維持するための工夫などについて調査し、教材開発の資料とする。

対象：看護師養成教育機関

●調査訪問先

- ①香川県 看護医療系大学
- ②福岡県 看護専門学校
- ③北海道 看護専門学校

期間：平成21年11月～1月

臨地実習やコミュニケーション教育について、それぞれの学校での取り組みのヒアリングを行った。臨地実習については、学生の緊張を緩和するため、実習前のオリエンテーションや面接などの工夫が行われていた。また、コミュニケーションについては、訪問したすべての学校において医療現場で必要とされているスキルに加え、日常的なマナー、挨拶などにも課題を抱えていた。

③実証講座の状況

■事前研修

- (1) 日程：平成21年11月5日
- (2) 開催地：穴吹学園 医療カレッジ
- (3) 対象：本学園 学生 17名
- (4) 内容：コミュニケーションをスキルとして捉え、信頼性、共感性、理論性のスキルについて解説およびロールプレイングによる実習を実施した。また、研修のはじめに各自のコミュニケーションスキルを測定し、事後研修時点との差を計測することとした。

■事前研修

- (1) 日程：平成21年12月8日
- (2) 開催地：穴吹学園 医療カレッジ
- (3) 対象：本学園 学生 17名
- (4) 内容：事前研修後、病院での臨地実習を終えた学生に自己の振り返りを行うと

ともにコミュニケーションスキルを計測し、事前研修時点との差を比較した。

コミュニケーションスキルの全体平均は、0.46ポイント上昇し、効果が認められた。また、事前研修時点から5ポイント以上得点を伸ばした学生は、6名（35.3%）であった。

■看護師育成のためのコミュニケーション教材に関する説明会

日 程：平成22年1月29日（金）

会 場：穴吹医療カレッジ

対象者：医療機関関係者（看護師等）

専門学校関係者（教員、学科長、教務責任者等）

目 的：開発した看護師育成のための教材の説明。

開発した教材の有効性を確認するとともに意見を収集する。

参 加：16名

参加者のアンケートから

- ・教材の範囲、領域、レベルについては、87.5%が適切であると回答した。
- ・参加者の75.0%が自院、自校で活用したいと思うと回答した。

④その他

3. 事業の評価に関する項目

①目的・重点事項の達成状況

本事業では、看護師を目指す学生のための教育プログラムを開発し、職業観や看護観を明確にし、高いプロ意識を持ち、医療現場で必要なコミュニケーションを理解し、経験値の高い看護師の育成を目指した。

職業観や看護観、プロ意識の醸成のために自己発見ツールを開発した。また、医療現場で必要なコミュニケーションを理解し、経験値の高い看護師の育成のためにコミュニケーション育成テキストおよび指導書を開発した。

コミュニケーションスキルについては、学生への実証研修の結果、全体の平均値が78.53→78.97と0.46ポイント上昇し、35.3%の参加者が5ポイント以上上昇と大きく変化させ、効果があることを実証した。

自己発見ツールによる職業観、看護観、プロ意識の醸成は、学生の臨地実習への取り組み姿勢と態度に表れ、受け入れ先の病院からは高い評価が得られた。

②事業の成果

看護師を目指す学生のため、以下の教育プログラム開発をし、基礎力の向上を目指した。開発した教育プログラムは以下のとおり

- ①自己発見ツール
- ②看護師コミュニケーション育成テキスト
- ③看護師コミュニケーション育成教員向け指導書

④CD-ROM（実習用にフォーマットをまとめたもの）

臨地実習を受け入れている病院など医療機関が学生に求める能力は、マナー、言葉づかい、コミュニケーション能力が上位を占め、専門的な知識よりも基本的なことができることを求めていることが分かった。また、臨地実習を受ける学生のコミュニケーション能力、マナー、言葉づかいに不満を持っていることが明確となった。

早期離職する看護師には共通した傾向があることが明らかとなり、主な特徴として、職業観が希薄、精神的に弱い、適応能力不足、コミュニケーションが苦手などであることが分かった。

コミュニケーションは、フィジカルアセスメントとともに看護師育成の新カリキュラムで導入されることとなったが、カリキュラムや教材、教員、評価など教育基盤が未整備であり、今後の課題とする教育機関から本事業の取り組みについて多くの問合せを受けた。

看護師の教育、早期離職の防止については、働き先である医療機関との連携が不可欠である。視察をした看護専門学校の中に高いレベルで病院と連携し、看護教育を実施している学校があり、臨地実習の進め方や担当看護師との連携した実習体制、病院からの要求を教育カリキュラムへ反映させるためのシステムなど今後の研究対象としたい事例を多く吸収することができた。

本事業の目指した「自分が看護のプロであるという強い意志や自覚を持ち、良好なコミュニケーションのもと、医療を支えるチームの一員として末永く仕事に取り組めるようにすること」については、開発した教育プログラムで教育した人材の入職をまたなければならないが、アンケートやヒアリング調査の結果や委員として参画いただいた医療関係者の方々のご意見が、本事業の取り組みの方向性と一致していることから効果が期待できると確信している。

③次年度以降における課題・展開

本事業で開発した教材は、本学園の平成 22 年度教材として使用が決定している。また、協力専門学校 4 校において教材活用の検討がされている。

本年度事業では、コミュニケーションと早期離職の課題が顕著である看護学生向けの教材を開発したが、協力専門学校からは、ほかの分野でも活用できる実習内容の教材がほしいとの要望が出ており、今回の成果をもとに専門学校のすべての分野に活用できる教材の研究・開発を進めてゆくこととしたい。

④成果の普及

本事業の成果は、医療看護系専門学校およびアンケートにご協力いただいた病院 761 件に配布し、その普及を図った。また、全国専門学校情報教育協会が主催する「専修学校フォーラム 2010」において、専門学校関係者を対象に成果報告を実施した。